



専門医として、かかりつけ医として、
患者さんの人生全てを支えたい

2013年9月取材

愛知県稲沢市
おおこうち内科クリニック 院長
大河内 昌弘 先生

さまざまな疾患を併発し、かつ一生の付き合いとなる糖尿病を診ることは、責任を持ってその人の人生全てを支えること——自らの役割をこう語るの、おおこうち内科クリニックの大河内昌弘院長。取材中、先生が繰り返し口にしたのは、「いかなる訴えにも対応します。ちょっとしたことでも相談してほしい」という患者さんへのメッセージでした。

ライフスタイルに合わせた対応

例えば、糖尿病の患者さんが白内障の手術を受けるとします。術後の経過を良好に保つためにも、まず血糖コントロールを安定させなければなりません。このため、一時的にインスリンの投与が必要となることがあります。しかし、視力が低下した状態で、インスリンの自己注射を行うことは、決して容易ではありません。同クリニックでは、このような場合、患者さんに来院してもらい、看護師が代わりに注射を行っているそうです。「1か月ほど続ければ、たいてい血糖コントロールは安定し、手術も可能となります」と大河内先生。「患者さんと相談しながら、最適な治療方法を提案したい」「一人一人のライフスタイルに合わせて、臨機応変な対応を行いたい」と話す先生の診療姿勢が形になった一例といえるでしょう。



臨機応変な対応に加え、クリニックの特長といえるのが“親しみやすさ”です。それを物語る一つが、クリニックのシンボルマーク。「患者さんからは、『似てる』とよく言われますね」と大河内先生は笑います。

一対一の人間関係を重視する



トイレを使用の際は、ランプが点灯し、待合室のどの位置からも確認することができます。患者さんとの関係を重視する先生らしい細やかな配慮です。

大河内先生は、例えば「来週、孫の結婚式があります」など、診察の際に患者さんが口にする何気ない一言も電子カルテに入力しています。その一つ一つが、コミュニケーションの糸口となり得るからです。次の診察時に「結婚式はいかがでした？」と尋ねれば、それをきっかけに新たな情報が得られ、同時にお互いの距離感は少し近づきます。先生は日々の診療において、こうした積み重ね、すなわち「患者さんの生活背景や人となりまで踏み込み、一対一の人間関係を築いていくこと」を重視しています。診療の場では、他人には相談しづらいストレスなど、患者さんとの関係が深まっていなければ聞くことのできない話というものがああり、こうした話を打ち明けてもらうことが、より良い治療につながる事例も少なくないからです。

糖尿病診療の進歩に貢献する

同クリニックのホームページからは、大河内先生が国内外の学会に積極的に参加し、また、頻りに講演活動を行っている様子がうかがえます。その理由を尋ねると、「糖尿病の薬物療法は目覚ましく進歩しています。より良い治療を行うためには、積極的に新しい知識を取り入れていかなければなりません」と強調し、さらに「しっかりと勉強しなければ、講演なんてできません」と続けます。もちろん、目的は自己研さんだけではなく、「勤務医時代の経験、学会や日常診療を通して私が得た知識・知見を伝えることが、糖尿病診療に携わる方々にとって少しでもプラスになれば」という思いもあるようです。

クリニックを開業して1年。患者数は増え続けています。多忙を極めても、このような活動を続けられるのは、「責任を持って患者さんの人生全てを支えたい」という強い気持ちがあるからなのかもしれません。



プロジェクターを備えたセミナールーム。ここでは、患者さんを対象とした糖尿病教室やスタッフの勉強会などが定期的に開かれているそうです。